

# 為末大

子供との距離感を考える

元陸上選手  
一般社団法人アスリートソサエティ代表理事

3度のオリンピック出場経験を持つ、男子400メートルハードルの日本記録保持者。2012年に現役を引退してからはさまざまなメディアを通じて自身の考えを発信し、その発言力で注目を集め続けている為末大さん。

常に自身を見つめて思索する姿から、「走る哲学者」と呼ばれている為末さんの論理的な思考と豊富な語彙の背景にあるのは「読書」でした。

「幼い頃は典型的な『やんちゃな子』だったと思いますが、母親いわく、人の気持ちに敏感なところがあったそうです。たしかに国語の教科書が好きでしたから、人の気持ちが描写されているものに興味があったのでしょうか」

小学2年生から始めた陸上でめきめきと頭角を現し、中学生になるとジュニアオリンピックへ出場。日本中学記録更新と、早くからアスリートとして

華々しい記録を打ち立てていきます。

「10代の頃は陸上漬けでした。しっかり本を読むようになったのは22、23歳ぐらいからでしょうか。そこからけっこう本を読むようになりましたが、子供の頃から絵本は家にたくさんありました。読み聞かせもしてもらっていたので、本好きの素地はできていたように思います」

中でも為末さんが思い出深いと語るのは、『おおきな木がほしい』（偕成社）という絵本。50年近く前に誕生し、いまなお読み継がれる名作です。

「自分の家の庭に大きな木がほしいと主人公の男の子が空想する話なのですが、その世界に引き込まれていく感覚が好きでした。」

それともうひとつ、私にとって読書の魅力は『どうしてそういうことになったのだろう』と思う感覚です。私

が生まれた広島県では平和教育が盛んなので、戦争や原爆についての本にふれることが少なくありませんでした。そこで『なぜ戦争が起きたんだろう』『どうして原爆を落とさなければいけなかったんだろう』と考えるようになったんです。何事も『自分の言葉で考える』という習慣は、こうした経験から培われたものかもしれません」

## 大切なのは「なぜ」「どうして」

為末さんが「走る哲学者」の異名をとるのは冒頭の通りですが、哲学とはまさに「なぜ」「どうして」を追求する学問。真実を探究するその姿勢は、幼い頃の読書体験から培われたものでした。

そして家庭では、5歳になる息子さんの「読み聞かせ」を担当しているそうですが、本選びも、この「なぜ」「どうして」がキーワードだといいます。

「基本的に本人が面白がりそうなものを選んでいますが、教訓的な本よりは『なんで？』『どうなっちゃうの？』というものを選んでいきます。人生という

のは、好奇心さえあれば、だいたい大丈夫かなと思っていますので」

為末さんに似ているという息子さんは、読み聞かせも、本も大好きだそうです。最近気に入っているのは、『アンダーアース・アンダーウォーター』（徳間書店）というポーランドの絵本。

ふだん見ることもない地面の中の世界、水の中の世界が紹介され、そこから「なぜ海の水は塩辛いのか？」という問いにも続く、まさに真実を探索していく作品です。

## 子供の好奇心を喚起する体験を

ご自身はもちろん、子供の読書についてもブレない方法論をお持ちの為末さんは、お手伝いや外遊びにおける子供との距離感についても、こんな説得力のある考えを持っています。

「うちはひとりっ子なのでとくにそうかもしれませんが、育児全般において親が『手を出しすぎない』ように気をつけています。ですから、妻と決めている子育てのルールは『与えすぎて奪わぬように』のひとつだけ。」



「与えすぎて奪わぬように」が  
我が家の子育てのルールです

**Profile** ためすえ・だい／78年広島県出身。男子400メートルハードル日本記録保持者。シドニーから3度連続で五輪に出場。現在は人間理解のためのプラットフォーム為末大学の学長、アジアのアスリートを育成・支援する一般社団法人アスリートソサエティの代表理事を務める。

## 為末さんのおすすめ本

### 親子で育てる ことば力と思考力

今井むつみ [著]  
(筑摩書房／本体1300円＋税)

ただ単語を暗記するのではなく、「意味」を自分で考えることで子供の「ことば力」が育まれる。その仕組みや実践方法を紹介。学術書のような内容がわかりやすく解説されているので、親子で一緒に家庭で取り組める。

